

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「イオン、千葉市などと自動運転実験店舗送迎活用ならむ」
- 2) 「国分とオカムラ、常温ワイン売場内に小型冷蔵ケース設置、つまみを販売」
- 3) 「ZARA、スペインに歴史的建築をリノベした店舗、売場面積5000㎡」
- 4) 「アシストスーツ、作業員の味方 積水ハウスなど続々導入」

1) 「イオン、千葉市などと自動運転実験店舗送迎活用ならむ」

イオンは千葉市と群馬大学と組み、同市内の公道で自動運転の実証実験をした。システムがハンドル操作や加減速をサポートする「レベル2」の実験で、幕張メッセとイオンのSCを結ぶルートを行く。自動運転は大型商業施設への送迎などでも活用が期待されており、イオンは今後も行政などとの連携を進める。

実証実験は23、24日に実施。24日には熊谷俊人・千葉市長が試乗し、幕張メッセと「イオンモール幕張新都心」の間のルートを行った。試乗後、熊谷市長は「行政としても、運用性を高めていくため様々な取り組みを考えていきたい」と話した。

イオンは全国に大型SCを展開しているほか、地方の中核店舗となる総合スーパーや食品スーパーも多い。そのため、自動運転が実用化されれば自動車の運転が難しい高齢者の送迎なども含め、消費者の利便性を高めることが可能になる。

同社の斉藤岳彦執行役員は、「自動運転のような先端技術の活用については、色々な形で外部と連携していきたい」と強調。実証実験などで得られた知見をサービス改善などにも生かす考えだ。

自動運転というと、ウーバーなど主に海外で普及しているというイメージも強い。新幹線や電車、自動車をつくる先進技術、自動運転などに携わる力は日本にとって海外からも注目される大きな力だ。今はまだ実験段階ではあるが今後のさらなる普及と実用化に期待したい。

2) 「国分とオカムラ、常温ワイン売場内に小型冷蔵ケース設置、つまみを販売」

国分は、什器メーカーのオカムラと共同で、ワイン定番売場内に小型の冷蔵ケースを設置し、温度管理が必要なチーズ、生ハムを関連販売する提案を開始した。

常温 Gondola に冷蔵ケースを組み合わせた新型什器をオカムラが開発し、ワインとつまみのクロスMD提案を国分が行う取り組み。

常温商品のワイン売場では、温度管理の必要がない乾きものと言われるつまみとの関連販売が主流だったが、小型冷蔵ケースを常温 Gondola 内に設置することで、チーズ、生ハムなど温度管理が必要な商品を、一つの売場で展開することができる。

これまでのワイン売場では、ワインと相性の良い、チーズ、生ハムなど要冷商品は、冷蔵ケースのある別の売場まで買いに行く必要があった。

冷やして飲むことを前提にしているスパークリングワインは、冷蔵ケースで展開する場合もあるが、常温 Gondola と冷蔵ケースが離れていて商品を選びにくい場合があった。

近年は、冷蔵ケースの上部にワイン売場を設ける売場もあるが、冷蔵ケース上では展開できるワインのアイテム数が限られるといった課題があった。

今回の取り組みは、常温 Gondola をメインとすることで、ワインを中心に、要冷商品のつまみを関連販売することやスパークリングを冷やして販売することができる。従来は、ビール類の冷蔵ケースの一角で、白ワインやスパークリングワインを冷やして売る店舗が多いが、ワインの在庫回転数は、ビール類と比べると低い。常温 Gondola 内で、白ワインやスパークリングワインを冷やして売ること、回転率が高いビール類の売場を拡大できるメリットもあるという。

冷蔵ケースの電源は、アース付きの100vを採用したことで、通常のコンセントにも対応した。結露による水滴などを集めるポットを装備し、フィルターの清掃も月に1回程度とすることで、メンテナンスしやすい構造を採用している。什器のサイズは、横890mm×幅460mmで、高さは850mmと1500mmの2種類を用意した。

今まで必然的に少し離れてしまっていた商品たちが同じ島におけるとなると消費者にとっても買い回りはよくなると思う。ワインとおつまみのほかにもパンとマーガリン、お菓子とジュースなど様々なMDに対応できそうだ。

3) 「ZARA、スペインに歴史的建築をリノベした店舗、売場面積5000㎡」

インディテックスは5月18日、スペイン・ビルバオに歴史的建築物をリノベーションした新店舗をオープンした。新店舗は、売場面積約5000㎡で、1階は全長95mとZARAの中で世界一の長さとなっている。1階はレディース、2階メンズ、3期キッズを取り扱う。

100年前の建築物を改装し、装飾的特徴を復元しながら、歴史的建築物の持つファサードを活用した。特に、中央部に位置する階段の吹き抜け、チャペル、暖炉、照明器具や本来から存在していた8本の柱に特長があり、そのままの状態で見守られている。天井、壁面や床面に対してもステンドグラスなどの本来の装飾による修復を施している。

建物の古い部分から新しい部分に風景が移り変わるようなイメージを確信した明るい雰囲気を出しており、4つの入り口はそれぞれ大通りに面している。また、インディテックスにおいて最も厳重な緑の建築基準に準拠している。インディテックスグループの環境対策責任に従い、従来の店舗と比較し、20%の省エネルギー、40%の節水を実現した。

100年前の歴史的建造物が持つ古き良きクラシックイメージを残していける、デザインの寿命の長さに感激した。また、古き良きデザインを大切にすることで、デザインの重要性に気付いた。リノベーションという新たなデザインと融合することで、新たな価値観を生み出している。

4) 「アシストスーツ、作業員の味方 積水ハウスなど続々導入」

建設作業員の人手不足や高齢化に対応するため、大手ハウスメーカーがロボット技術を導入する動きが相次ぐ。作業時の力を補助するアシストスーツの着用などで現場の負担を減らし、効率を高めるねらいだ。

積水ハウスは天井作業などで腕にかかる負担をやわらげようと、アシストスーツを12月から順次、全国で導入する。米社が開発したアシストスーツ「Ekso Vest（エクソベスト）」を日本人の体形に合わせてるとともに、住宅の施工現場で使いやすいように改良。着用するベストは、ガスの圧力でひじを支える構造になっていて、負担を軽減できるという。高い場所のビス打ちなど上向きの体勢に威力を発揮してくれると期待する。

さらには、天井ボードの貼り付けをするロボットの開発をめざす。作業員はタブレット端末によって、資材の運搬や固定する位置をロボットに指示するだけにしていく。2020年にも実用化する考えで、「最大7割の負担軽減につながる」（積水）という。

大和ハウス工業は4月、重い資材を持ち上げる時に腰にかかる負担をやわらげるため、アシストスーツを国内の9工場に導入した。今後、建設現場でも導入したいという。

ALLロボット化ではなく人の力をアシストすることでも随分作業効率も上がるし細かな点まで対応もできると思う。年齢や体力を理由にリタイアせざるを得なかった人をサポートすることで新たな雇用にもつながるのではないか。効率UPが建設費用のコストを下げる結果にもつながれば、多くの人にメリットが生まれるだろう。